



## 戦後の同和・人権教育を代表するリーダー 林力（はやし・ちから）氏を囲む会に参加して

### 林力氏～戦後日本の同和・人権教育活動の先達・生き証人

さる10月14日、「同和教育・人権教育研究全国交流会」（林力先生を囲む会 in 京都）が京都府亀岡市内で行われました。

全国各地から、林力氏を慕う同和・人権教育や部落解放運動の関係者・約百名が集まり、林先生の話に熱心に耳を傾け、これからどんな社会をめざすのか等について活発な意見交換を行う素晴らしい集まりとなりました。

林先生は1924年生まれで現在87歳。福岡県出身です。

小学生の頃に御尊父が「らい病」（ハンセン病）に犯され、家族から遠く離れた鹿児島県の僻地にある星塚敬愛園に収容されました。同級生から「くされた子」と言われて、深く傷ついたとのこと。

残された母と子で各地を転々とする生活を送りました。

戦後、復員して小学校の教師となり、初任地で同和地区の小学校に赴任。そこで部落の人たちとの運命的な出会いが林先生の一生の方向性を決めることになりました。

部落の人たちの「学校の先生達が、わたしたちと手を握るなんて今まで考えたこともなかった。どうぞ、部落の完全解放まで頑張ってください」という声に後押しされて、「とにかくムラに足を踏み入れること」をモットーに夜間や休日を利用して、文字を読めない部落の人々に文字を教える運動を始めました。全国に先駆けて繰り広げられた識字運動の始まりのことです。

その後、1961年に福岡県下の仲間30人で福岡県同和教育研究協議会を発足。それが、全国人権教育研究協議会（毎年、1万人以上の関係者が全国から集まり交流する大会を開催）に発展していくこととなります。

当日、林先生の話された言葉の中から特に印象に残った言葉を記します。

- ☆ 世の中全体から“現場主義”が消えつつある。
- ☆ 人の“いのち”が見えなくなった。（例として、昔は「通夜」は夜を通して故人を偲んだ。）
- ☆ 部落の人が、識字運動で文字を覚えてから「夕焼けが美しくなった」といった。迫害のなかで生きてきた人が、文字を通じて人間らしい感性を取り戻した。
- ☆ 義務教育の教科書無償化が実現したのも、こうした部落解放運動の大切な成果。
- ☆ 部落差別が無くなつたという世評が流布しているが、仕事の保証や教育の支えなど、まだまだ不十分な状況にある。これからも、同和・人権教育や部落解放運動に元気を出して取組んでほしい。等々

結びに、林先生の近著「つれづれの人権日誌」（せいいうん）から、印象的な言葉を引用します。

「差別の問題を論じるとき、何よりも評論家であってはならないと連太郎（林氏のペンネーム）は思っている。だから、学者の「人権論」など連太郎はあまり信用しない。人権や差別の問題は「論」ではなくて、「わたしが」である。この差別と人権侵害に満ちた社会のなかで、「わたしが何を考え、そのことに対して何をしてきたか。何もしてこなかつたのか、これから何をしようとしているのか」ということを抜きにして、差別については語れないと思ってきた。」含蓄のある言葉だと思います。